※ニューノーマル（New Normal／新常態）…社会に大きな変化が起こり、変化が起こる以前とは同じ姿に戻ることができず、新たな常識が定着している状態。

ナニワの地から世界を視野に新たなムーブメントを

左から中田一葉さん、山本寿弥さん、成田奏さん、貞光智宣さん

能楽囃子ユニット「ナニワノヲト」

2019年11月、20代の若手能楽師４人が、幅広い世代に能楽囃子の面白さを伝え、600年の伝統を未来につなげるべく、能楽囃子ユニット「ナニワノヲト」を結成しました。その直後からコロナ禍の苦境を乗り越えてきたメンバーたちは、ニューノーマル時代を迎えた今、演奏会やワークショップ、インターネット配信など、新たな勢いで活動しています。代々続く能楽師の家に生まれ、いつかは４人で海外公演をしたいと口を揃える皆さんに、能楽にかける思いなどをお話しいただきました。

◉人間ではない者を表現

中田 一葉（なかた かずは）さん

〈太鼓方金春流〉

太鼓は、神様や鬼、妖怪、幽霊などが登場する場面で、その足音や鼓動を表現するものとして使われることが多くあります。昔の人は、二つの撥（ばち）を使って打つ太鼓の音に人間ではない雰囲気を感じていたんですね。また、太鼓は鼓に比べて音も２倍出せるわけですから、曲のクライマックスを一層盛り上げ、段々と終わりへと持っていく役割があります。そうして演奏が終わって客席を向いたとき、お客さまの満足された表情を見てとても充実感を感じます。

私は、３歳から父のもとで太鼓の稽古を始めました。舞台に出るのは当たり前だと思って育ちましたし、そのために厳しい指導を受けるのも当然のことと受け入れていました。小学生の頃、学校に謡本（うたいぼん）※を持っていって、休み時間におさらいをしていたほどです。

コロナ禍で公演中止が続いていたとき、祖父の会社で事務の仕事を手伝っていました。初めて能楽以外の仕事を経験し、ふと“こういうのもいいな”と思いましたが、やはり舞台での演奏が好きですし、能楽の世界でしか経験できないこともありますので、あらためてこれからも続けていきたいと思いました。現在、能楽界で太鼓方は非常に少なく、私が最年少です。だから私が次代の太鼓方を担わなければならないという責任も感じています。

最近は海外公演も再開され、今年６月にポーランドで公演を行いました。このチケットはすぐに完売したそうです。外国の人は日本の伝統芸能に大きな関心を持っていて、日本文化は世界に誇れるものだということをあらためて実感しました。

※謡本…能の台本に謡曲の譜を付けたもの

1996年大阪府大阪市出身。人間国宝三島元太郎および父中田弘美に師事。大阪能楽養成会卒業（2010年入会）、公益社団法人能楽協会会員（2018年入会）。趣味は写真で「夕陽丘うえまち写真コンテスト（2020年）」入賞（七坂賞）の腕前。

◉一瞬の静寂に感じる美

山本 寿弥（やまもと としや）さん

〈大鼓方大倉流〉

甲高く鋭い音色が出る大鼓は、４人の中で最もインパクトが強く、掛け声も強いので男性的な楽器といわれます。音色は強弱の二つだけですが、その限られた音色を使い分けて最大限に表現しているところを聴いていただければと思います。ナニワノヲトの公演のトークコーナーでは、そんな楽器の特徴や曲目、能の場面などを分かりやすく解説し、能楽に馴染みのない方にも興味をもっていただけるよう努めています。それは同時に、私たちのトークスキルの鍛錬にもつながっています。

演奏中は、自分の演奏に加えて他の奏者の音や掛け声に対応することで頭がいっぱいで、楽しむ間もなく気づいたら終わっているという状態です。ただ、舞台上で何の音も発しない瞬間があり、その張り詰めた静寂をとても美しく感じ、そんな素晴らしい舞台に携わっていることを嬉しく思うことがあります。

私は代々続く大鼓方の家の４代目です。父は私が能楽師になることを強制しませんでしたが、継いでほしいという気持ちはひしひしと感じていました。私は英語の教師になるつもりで大学に進学しましたが、小学校や中学、高校などで能楽や楽器のことを教える機会があって考えが変わりました。人に教えながら伝統文化を守り継承していく仕事は、教師と能楽師の両方をしているのと同じだと思ったからです。

コロナ禍で１年以上公演が中止されましたが、この間、父から課題を出され、いつも稽古をしていました。公演日という目標がなかったので辛かったのですが、これで父との会話を深めることができたし、父の能楽師としての凄さを知る機会にもなりました。

1994年大阪府豊中市出身。祖父山本孝および父山本哲也に師事。大阪能楽養成会卒業（2010年入会）、公益社団法人能楽協会会員（2018年入会）。趣味は漫画、ゲーム、ラーメンの食べ歩き。漫画の話題作はほとんど読んでいる。

ナニワノヲト
組曲「夕立ち」の
プロモーション動画

※能楽囃子…太鼓方、大鼓方、小鼓方、笛方の４人で構成された能楽の楽隊。４つの楽器によって、物語の情景や登場人物の感情を力強く表現する。能の伴奏だけではなく、能楽囃子だけによるコンサートも行われる。囃子は向かって左から順に楽器の大きなものから並ぶことが決まっている。

◉能楽ならではの高揚感

成田（なりた） 奏（そう）さん

〈小鼓方幸流〉

現在、30代以下の囃子方は20人程度しかいませんが、ちょうどいい感じで年齢の近い囃子方が関西に４人いたので、私からユニットの結成を呼びかけました。私たちの父親世代が20～30代に「響」というユニットで活動しており、自分たちもチャレンジしたいと思ったからです。

小鼓の演奏では、左手で紐を握ったり緩めたりして皮の張り具合を調節し、さまざまな音色を使い分けています。また、掛け声を出すタイミングは１小節の中で２拍目は大鼓、４拍目は小鼓というように曲ごとに決まっていて、私がリーダーシップを執って演奏を引き締めようとするときは、誰よりも強い掛け声を出して意思表示をします。こうして互いに引っ張り合って演奏に高揚感を生み出すのは、歌舞伎や日本舞踊とは異なる能楽ならではの特徴です。

私は小学生の頃から、歌手やスポーツ選手のように自分の才能や技術を磨いてそれを職業にすることに憧れていました。小鼓に触れてはいましたが、能楽に関心はなく、中学生になると離れていきました。しかし、高校卒業前に父の後見で舞台に出ていたとき、囃子方が汗だくになって『班女（はんじょ）※』を奏でているのを間近に見て、衝撃を受けました。謡の意味は分かりませんでしたが、演奏によってシテ（主役）の感情の起伏がはっきり見えたんです。どうすればそんな表現ができるのか、囃子方を汗だくになるまで必死にさせるものは何なのかが気になり、真剣にやってみようと思いました。コロナ禍で舞台に出ていない間は、能の歴史や曲目について勉強し直し、もっと能に近づきたいという気持ちが高まりました。

※班女…遊女の哀切な恋心を描いた世阿弥の名作

1996年兵庫県神戸市出身。曽和博朗、曽和正博および父成田達志に師事。大阪能楽養成会卒業（2013年入会）、公益社団法人能楽協会会員（2019年入会）。令和４年度大阪文化祭賞奨励賞受賞。趣味は料理作りで、最近は自作の中華料理でビールを楽しむ。

◉引っ張り合いを楽しむ

貞光（さだみつ） 智宣（とものり）さん

〈笛方森田流〉

笛は囃子方の中で唯一の旋律楽器で、打楽器の３人が作るリズムに乗ってメロディーを奏でます。腹の底から響く地鳴りのような音から、空間を切り裂くような高音まで音色は幅広く、能のさまざまな曲を一管で表現します。

能は、一度きりのリハーサル以外の全体稽古をしません。一期一会の良さを大事にして、何度も同じことをしないと決めているからです。だからイメージと違うまま終わることもあれば、他の囃子方に引き立ててもらい、思った以上に満足な演奏ができることがあります。私たちはこれを“引っ張ってもらう”といっていますが、私の方から引っ張ってやろうと思うときもあり、そうしたお互いの気持ちを感じる瞬間が面白いです。

私は４代続く笛方の家に生まれ、10歳頃から１回30分ほどの稽古を月３回ほど、ゆるい感じで続けました。父は、“他の職業を選んでもかまわない”といってくれていましたが、大学で就活時期を迎えると、笛が自分のアイデンティティーの一部になっていることに気づき、それを捨てて能以外の仕事に就こうとは考えられませんでした。私たちには定年がありませんので、60歳になっても80歳の先生から教えられることがあります。これはとても大事なことで、円熟の歳になってもまだ芸を向上させることができるんです。生涯勉強といわれるゆえんです。

コロナ禍がきっかけで、インターネットでの動画配信が増えました。能楽師はライブ感を大事にしますが、能に誘う間口を広げる意味で、やってよかったと思っています。海外発信や外国の人向けのワークショップなども大事な仕事で、目下、英会話の上達が課題です。

1992年奈良県生駒郡出身。祖父貞光義明に師事。大阪能楽養成会卒業（2012年入会）、公益社団法人能楽協会会員（2018年入会）。海外ユーチューバーの番組を英語字幕で見て英会話を勉強中。今年7月に待望の娘が誕生し、インスタグラムに子育ての様子をアップ。